ヨーロッパアグリ&ルーラルライフ視察Ⅱを終えて（一瀬きぬ子）

【１日目（8月28日）～2日目（8月29日）】

最初に、ドイツ北部のベルリンに向かった。ベルリンは、ドイツ北西に位置する首都で、面積が約890㎢あり、それはパリの9倍にもなる。中央を流れるシュプレー川の両岸から開けた平野部には、緑にあふれた市街が広がる。整然と立ち並ぶ街路樹に多くの公園がある。中でも街の中央に位置するティーアガルテンは、大都市の公園としては最大規模だ。郊外に足を延ばせば、ミューゲルゼーヴァンゼーなどの湖も多く点在する。

ベルリンは、17世紀以降プロイセン王国の首都として発展を遂げ、1871年のドイツ帝国（第2帝国）建設により帝国の首都となってからは、より大きく繁栄した。しかし、ヒトラーの出現で陰りが訪れ、第2次世界大戦では壊滅的な打撃を受け、1945年ベルリンは陥落した。以後、東西の国家（東ドイツ、西ドイツ）に分断されてきたが、西ドイツには移民が多く、フランスからの移民が1980年には600人いたそうで、西ドイツ発展の背景にはこのような事情がうかがえた。

1989年、ベルリンの壁は崩壊されたが、今でもシュプレー川沿いにはベルリンの壁が残されている。

次に、60年の伝統を持つ「ドイツ農村女性連盟」を訪問した。地域女性が12,000箇所から連盟に加入しており、現在では50万人の会員のうち農村女性が約50%で、残りの50%は、専門職、名誉職、ボランティア、事務職等とのことであった。

遠い所からは2日間かけて連盟に参加し、会費は22ユーロ（日本円で約3,000円）とのことで、一部の会員は給料があるが、ほとんどの会員がボランティアで活動しているそうである。

連盟では、女性の悩みや相談が上がってくると、多くの会員により会議が開かれ、その中で問題を解決していくという流れになっており、なんと素晴らしい組織だろうかと感心した。日本には、「地域ごとの婦人会」や「JA の女性部」など組織の中で女性部が存在するが、「行政のための婦人会」や「JA のための女性部」であったように感じている。個人個人が尊重され、様々な職業人が集い、農村女性を支援していこうとする名誉職に誇りを持っている、そんな連盟の集まりには時折大統領も参加し、名誉職の会員を表彰しているそうである。

これらの学びの中で、女性の活動のために何か一つでも心がけていかなくてはならないと感じた。

【 3日目（8月30日）】

リューベックに移動。リューベックは、バルト海に注ぐトラベ川の中州に広がる街で、12～16 世紀にハンザ同盟の盟主として大きな繁栄を誇った都である。今も当時の栄光が随所に残り、旧市街は世界遺産に登録されている作家トーマス・マン生誕の地でもある。

北部では日本人に会うことはほとんどなかったが、旧市街を見学後に帰る途中、若い日本人男性が「日本人？」と懐かしげに声をかけてきた。彼は大学生で、現在、福祉の勉強に来ていると言っていた。北欧に来て3日間で初めて会った日本人だった。

この後、多角経営農家に向かった。ここは、70 年以上もの歴史を持つ最も古いオーガニック栽培が行われているデメーター農家で、両脇に大豆やじゃがいも畑が永遠と続き、至る所に風力発電が設置されている。まるで北海道を思わせる風景が果てしなく続き、やっと農場に到着した。農場 400ha 中、シーバクソン 110ha を栽培し、その他飼料用の栽培もしているとのこと。シーバクソンは、レモンの数倍の酸味がある分、マルチビタミンも多く含まれるという特長を持つため、薬品会社や美容関係との取引が多いということだ。

ちょうどこれからが収穫時期とのことで、実が小さく棘も多いため、人件費がかかるだろうと思っていたところ、30～40cm に枝をカットし、液体窒素につけることで葉や枝の不純物を取り除くという収穫方法であった。これを、400 kgのケースに入れ冷凍し保存すると、1ha で 6～8t 収穫できるらしいが、収穫までには、挿し木で 3～4 年、新木では 7～8 年かかるため、やせた土地や砂地が適している性質上、耕作放棄地の有効活用が十分可能であるということだった。シーバクソンの寿命は 20～25 年といわれており、メス株 12 に対してオス株 1 の割合で定植していくと、収穫時 20 人の 6 週間単価は、1 kg当たり 720～800 ユーロ（日本円：約 98,000～109,000 円）になるとのこと。

加工品は、ホームセンター様の売店において手頃な価格で販売されており、皆購入していたように記憶している。

このデメーター農家は、奥様が代表をされていてとても素晴らしかった。

GARTENMARKT
STORCHENNEST

Fachbetrieb für
Garten- und Landschaftsbau
PG Storchennest
Ludwigslust e.G.
Tel. 0 38 74 / 2 19 73
Fax / 66 32 44
www.sanddorn-storchennest.de
Sanddorn
Storchennest
BIOPARK
Friedrich-Naumann-Allee 26
19288 Ludwigslust
info@sanddorn-storchennest.de

2016.08.30

それから、ドイツのCSA（地域社会が支援する農業＝ドイツ語で「連帯農業」の意）を実施している農家を訪ねた。消費者が先行投資をして生産者から農産物を届けてもらう形らしいが、「天候に左右され思うように作物が取れなくても、届けられなくても当たり前」ということを投資者が理解されており、返金しなくてもいいそうだ。

日本でも最近は、温暖化による被害が大きく努力をしても厳しい現実があるが、説明を聞いているとCSAに取り組むことが日本でできるなら、日本の農業も楽しい方向になるだろうな、と思った。

また、ここには幼稚園が併設されており、デメーター農場であるとともにガードナー農場でもあった。1888年に建てられた今では廃墟同然の建物を、11年前（2005年）ヘンリーさん（奥さん）が購入されたもの。（元伯爵が住まれていた建物で、45人の村人が暮らしていたという大きな建物である。

農地4haに、牛2頭、ヤギ14頭にうさぎ小屋があり、広い草原ではないが、自然の中で育てたヤギからは、チーズ製造のために搾乳している。また、9年前に農場幼稚園を考え、教育理念＋農場で農場主の奥さんが資格をとり、託児所と幼稚園を併設して娘のアンナさんが園長をしながら、3～7歳を15人ほど預っているとのこと。一番遠くからは35㎞も通っているらしい。園では、動植物とのふれ合いや収穫も自由参加で、昼食後のお昼寝の設備も整っている。朝食は9:00～9:30分で、冬でも森や外で過ごし、食事は子どもたちと作り、1年を通じた食育ができる。これには県1/3、市1/3の助成があるため、充実した活動ができているとのこと。

連帯会員は50人で、作業等にも参加される。有機栽培は輪作が大切で、キャベツ・人参・豆・小麦等連作障害を避けるために農地を5年間あけるそうである。私たち参加者も、自然の中で有機野菜を使った料理でもてなしを受けた。いくつもの品種を使ったじゃがいも料理に野菜料理、そしてデザートも美味しかった。

私は、子育てをするために農業環境が本当に大切だと思っている。実際、我が家の孫も時々畑につれていき、一緒に作業をさせてみるが、3～4歳でも1日中飽きずに遊ぶし、いろいろなことを教えることもできる。日本の様に、危ない・汚いなど、勝手な理由で子どもたちが箱詰め状態になっているように感じるが、先進地に行くと、全てが環境第一に考えられ、大切にされ、そして自由という言葉が1人ひとりに尊厳されている。植物や動物に関わり、自然環境で育った子どもたちは、本当に心やさしい大人に育つだろうな、とつくづく感動させられた。

午後、多角経営（農業の多面的機能を利用）農家のカイザー農場へ。

カイザー農場…直売所、農場カフェ併設、(200ha 生産)

・アスパラガス（60ha）…収穫 26 万 kg(ポーランドより 70 人雇用)。
1 時間に 6,000 本抜く機械がある。

・馬鈴薯（30ha）、　・大麦・小麦（農協出荷）、　・カモ肉、　・畜産ギャロウェー種

・菜の花（油＋えさ）、　・ソリンス（4.4ha）グリーン…16ha は寝かせる

30 箇所で 80%直売するために、1t トラックで夜中のうちに運ぶ。移動型直売所を持っており、地元には、新聞やチラシで宣伝しておく。1 直売所につき、3～4 人で対応し、その都度地元の店員を雇用。時給 8.5 ユーロ（日本円：約 1,200 円）。事務所は、奥さんと他に 1 人。

ドイツは失業者が多いが、介護等の仕事はしない。カイザー農場では、ご主人がポーランド語も話せるため、15 年前から季節労働者を受け入れている。「3 時間で通える/労賃は 2.5 ユーロ」を条件にすると喜んで働きに来てもらえるしとても真面目だという。住居と昼食は提供で、1 日平均約 8 時間で 82 ユーロ（日本円：約 12,000 円）。1 ヶ月働くと、2500 ユーロ（同：36 万円）になるそうだ。

ご主人が屋外の仕事、奥さんが事務所と直売所の管理、そして息子さんが農業教育中。2～9 月は、おばあちゃんが料理をして、慣れた人がチーフとなってアドバイスするようにしてある。

馬鈴薯は、店の入り口に展示してあり、店内は、ほとんど加工品が陳列されている。日本企業のようにすべて整理整頓されており、学ぶことばかりだった。宿泊については、4 人部屋程度で、きれいにしてあり、日本のレベルでは、何十年経ってもあれほどの環境美化は難しいのではないかと思った。しかし、努力は必要だと思う。

加工品は、品数が多く、購入したいと思っても限られた時間ではなかなか選べなかった。

【４日目（8月31日）】

デンマークのオーデンセへ移動。オーデンセは、「デンマークの庭園」とよばれるフェン島北部に位置するデンマーク第3の都市。アンデルセンの故郷であり「花のようだ」と称えられた街で、中世の面影を伝える家並みと近代的な面とが同居する街である。

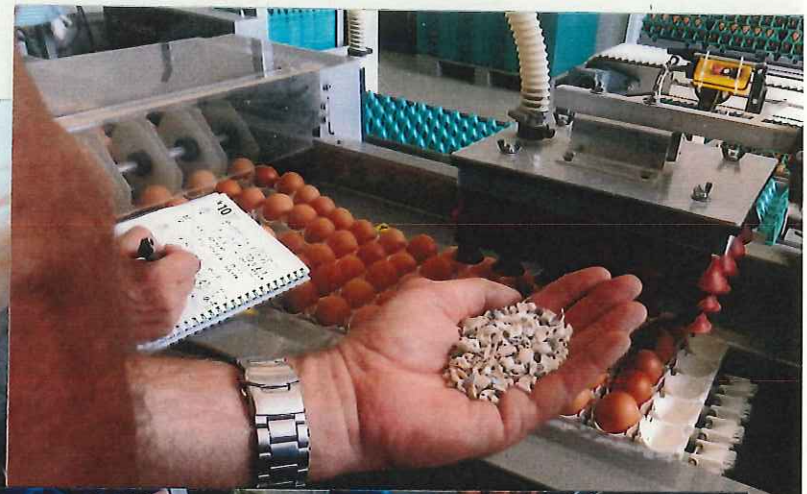
この街並みをはずれた所の「採卵デメーター農場」を視察した。採卵協同組合70戸のうちのデメーター農場で、50ha所有。鶏舎は、18度以下にならないようにするため、換気が何日もできない時のためにアンモニアが飛ぶようにしてある。自動でドアが開き、外での放し飼いもできる。えさは、ブラウンとイタリアンの配合。

1905年からデンマークの王室に利用され、王冠の印章が卵に押されている。デメーター農場の卵は1個5ユーロ（日本円：約680円）で、一般の卵の5倍の価格となっている。

ヒヨコから鶏卵になるまで日数がかかり、専門所で孵化させる。その後、16週から18週まで育て、すぐに卵を生まない生活を学ばせ、19週から20週になるとS卵を生ませるために生む場所を教える。このためには、1日10時間の照明が必要で、水と光が十分だと、70週位まではきちんと卵を生むようになる。80週を過ぎると殻が柔らかくなるので、動物のえさにしかならないが、動物愛護団体がうるさいので処分が大変らしい。

180haの穀物を作る場所があるが、デメーターを活用する場合は、他の動物を育てるという条件があり、30頭の牛を育てているため、穀物は飼料となる。自然栽培を目的とするには、家畜との接触時間を長くする隣栽も必要となることから、豆、そば、ドイツ麦、フランスコーン等、植物性のものだけ栽培している。

ラインから流れてくる卵を奥さんが選別から箱詰めまで、中心的な立場の様子で、ご主人が穀物の方に関わっておられるようだった。



2016.08.31

2016.08.31

2016.08.31

【５日目（９月１日）～６日目（９月２日）】

コペンハーゲンに向かう。コペンハーゲンは、シェラン島東海岸にあるデンマークの首都で、面積約88.25ｋ㎡、スカンジナビア半島最大の規模を誇る商人の港という意味を持つ。

デンマークの農業自給率は300％で、豚が一番多く、日本が一番の得意先であるとのこと。九州と同じ面積にもかかわらず、コペンハーゲンの人口は50万人。

子育ては、産後１年間は国が見て、保育教育に力を入れる。託児所は、半年後に入れて、７歳まで産休が取得でき、待機児童もゼロ。出生率も２人。児童福祉についても、美味しいものを食べて喜びを味わわせている。保育は、自律（立）精神を養うため、保育士ではなく生活指導員が担当するが、不慮の事故については、100％防げることはできないので、その点は親の理解がある。また、親の役目は子どもが18歳になるまでで、その後は国が育てる。

以上の理由から、教育について、授業料は大学まで無料で進学も自由（実際には、高校には60％進学、その他109種の専門学校がある。）また、先生も10年間変わらない。７週間ある長期休暇も宿題は出ない。食事は、個人に合わせて食べさせる。登校拒否は、ゼロ。金曜日は半日で終了。

交通について、電車は１時間は乗り放題で、必ず電車内では座ることとなっている。病気を減らすため、車を減らして自転車を推奨している。（車の１車線を減らし、自転車ハイウェイを確立している。）

これらが、農業以外における新たな発見であった。

国民年金は全ての人が受給できる。また、職についている国民の 80%は、65 歳からは国民年金に厚生年金が上乗せされて支給される。さらに、失業した場合は、90%を失業保険として 2 年間受け取れるとのこと。

国会は、119 議席のうち 40%が女性で地方議員は給料制とのこと。市議はボランティアだそうで、仕事帰りの夕方から議会をするそうである。私が調べた限りで言えば、国会議員、地方議員、市町村議会議員等、行政のすべてにおいて日本が世界一の報酬を得ているようで、2 番目が韓国である。消費税を増やすのも結構だが、まず使い方の問題をなくしてからだと思う。

確かに、デンマークでは物価が高いうえに 25%の消費税が徴収されるが、医療費も学費も無料で安心して暮らせる福祉が充実した社会となっており、40%の女性議員がいるというのも 90%の高い選挙率でうなずける。

日本は、戦後 70 年経っても、中身の変わらない政治が繰り返され自給率が上がらないのも農林政策に問題があるのではないかと思う。常に国連から指摘を受けながら、やっと頑張る女性が現れれば、セクハラやパワハラで意欲喪失となってしまうことも、女性の社会参画が遅れている原因なのかもしれない。日本が先進国であるのは、科学と技術分野だけのような気がする。国連の仲間入りをしているとはいえ日本の席が後方にしかないことも残念だと思う。

今回の研修のほか、これまでにイタリア、オーストリア、ドイツ南部、ニューヨークへ自費で農場視察に行ったが、6 次化に成功している農場がたくさんあったことが印象的であった。それらの農場では、委託販売はせず、すべて農場内に販売所を設立し、1 つの作物であっても多くの加工品を販売し、農家レストランや民泊、直売加工など工夫を凝らしていることが成功の秘訣だと感じた。何百 ha もある広大な敷地でも、奥さんがほとんどを担当して利益を上げているところが素晴らしかった。また、ニューヨークでは、大学教授や医師、弁護士などの仕事をしながら農業も手伝うということで、「農業に赤字はない」と誇らしげに発言されている姿を見て、さすがはアメリカ女性だと思った。

まだまだ先進地に学ぶ事が多いので、チャンスがあれば、また学びの機会を得たいと思う。